

芋又主御嶽



1594(万暦22)年、砂川親雲上旨屋(長真氏旨屋)は、御物宰領(宮中や官庁に捧げる品物の管理責任者)として琉球王府に出向き、仕事を終えて島に帰る途中、逆風で中国に漂着。ちょうどこの年、中国にルソンから芋が伝わり、栽培普及が行われていました。旨屋は3年間中国に滞在し、1597(万暦25)年、芋を

持って帰途につきますが、またもや遭難して九州へ漂着、同年、なんとか宮古へ帰島しました。芋は台風や旱魃にも強く島の風土に適したため、次第に芋が主食となりました。

こうして旨屋はソーヌ主(芋の神様)として御嶽に祀られ、戦後間もない頃までは、毎年8月に初芋を捧げて祝う「ソープス」という芋の豊作感謝祭が盛大に行われていました。

ちなみに琉球は1605(万暦33)年の野国総監が中国から芋の苗を導入。後年、琉球の芋が薩摩に伝わって「さつまいも」と呼ばれるようになりました。



琉球王国の位階制度

琉球王国の位階の制度は15世紀末、尚真王の頃に始まり、近世の制度が確立したのは、17世紀、尚貞王の時代です。

呼称	位階		品位	地頭職	領地	冠
王 族	王子 (国王の子 / 王叔 / 王弟)		無品 (最高品位)	按司地頭	一間切 (現在の市町村相当)	 はちまち
	按司 (王子の子 / 按司の跡継ぎ)					
上級士族 (下司)	親方 (政治の実務 士族の最高位)		正一品	総地頭	一間切	 紫冠
			従一品			
			正二品	脇地頭	一村	
			従二品			
一般士族 (平士／百姓)	親 雲 上 (地頭職の称号)		正三品	脇地頭	一村	 黄冠
			従三品			
			正四品			
			従四品			
里之子 親雲上	筑登之 親雲上	正五品	領地なし		 黄冠	
		従五品				
		正六品				
		従六品				
	正七品					
	従七品					
	里之子	筑登之	正八品	地方役人の位階		 赤冠
			従八品			
			正九品			
	子	仁屋	従九品	大地頭 地頭代の相談役		 赤冠
譜代※	新参※		捌 理 首里大屋宇、大掟、南風掟、西掟の4人をいう。間切番所の幹部役人		 青冠 形は不明	
平民 (百姓)	町民、農民、地方役人		文 子 ていくく／てくこ			

※譜代:1689年に士族として系図を作成した家系
新参:功績をたてて新たに士族に参入した家系

参考:『沖縄大百科辞典』(1983)/沖縄県立博物館

ふな だてい う たき 船立御嶽



あに いもうと
兄「かねどの」と、妹
「しらくにやすつかさ」
か じ しん のうぎょうしん
を鍛冶神・農業神とし
まつ う たき まい とし
て祀る御嶽です。毎年
きゅうれき
旧暦の11月8日には、
や まつ
鍛冶屋などがフイゴ祭
りを行っています。

ふな だてい う たき ゆ らい 船立御嶽の由来

むかし く め じま あ じ ひと りむすめ
昔、久米島の按司に一人娘がいま
したが、あによめ じゃ おも
したが、兄嫁が娘を邪魔に思い、按
司を騙して娘を小舟に乘せて追い出
してしまいました。これを見かねた
兄が小舟に泳ぎ乗り、妹とともに漂
流しました。翌朝、宮古島の漲水の
はま ふなだて ち す はし
浜に漂着し、船立の地に住み始めま
す。やがて妹は住屋里かねこせぬ主
と夫婦となり、9人の子を儲けまし
た。そして成人した子どもたちは祖
父に会いたいと、母を連れて久米島
に戻りました。按司は娘を追い出し
たことを後悔しており、とてもよく

してくれたうえに、くろがね まきもの も
黒金と巻物を持
たせて宮古島に帰しました。兄はこ
れを元に鍛冶屋を起こし、農具を作
りました。これによって宮古島で農
業が発達し、豊かになりました。多
くの人の飢えをしのぎ、安楽に暮ら
せているのはこの兄妹のお陰だとし
て、ふたりの骨を船立山に納め、御
嶽の神様として崇めました。

う たき ゆ らい き
『御嶽由来記』より



ユーラジ御嶽



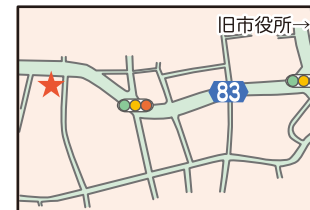
この御嶽は「ユーラジ
(夜占の地=ユウラの地
=ユウラジ)」御嶽と呼
ばれています。『宮古島
記事仕次 (1748)』によ
れば、吉日を選んで火の
神様に焼香をし、「玉城・
普門好善」と唱え、その

ときに道を行く人の発する言葉の吉凶に従って事の善悪を知る
占いがあったとされています。

たまぐすく ふ も こ ぜ 玉城普門好善の話

昔、普門好善という美しい娘がお
り、玉城という琉球の商人の間に男
の子をひとり儲けました。仕事で数
年間八重山に渡っていた玉城がよう
やく島に戻り、妻と子の待つ家を覗
くと、夜泣きをする子をあやす彼女
の姿が見えました。そのとき、泣き
止まぬ子にむかって、「流浪人の子
が何故夜泣きをするのか」と普門好
善が叱りつけたのです。これを聞いた
玉城は「私は公用で旅をしている

のに、流浪人とは何事か！」と怒
り、子どもを奪い取ってそのまま琉
球に戻ってしまいました。首里に帰
る途中、「この子は成長したら按司
となるだろう」と占い師に言われ、
そのとおりに息子は出世して按司に
なりました。



仲屋金盛ミャー力



このミャー力は16世紀初頭に宮古の支配者として君臨した仲宗根豊見親の嫡子(家を相続する者)、仲屋金盛豊見親を葬った墳墓です。仲宗根豊見親亡き後、家督を継いだ仲屋金盛は、「野原岳の変」によって自殺してしまいます。この事件を機に、豊見親の称号は廃止され、宮古における琉球王府の支配体制が強まっていきました。

『忠導氏仲宗根家系図家譜』には「金盛・不届きに付き家督を継がず」と記されており、本来ならば「仲宗根豊見親の墓」に入る立場でしたが、このような離れたところにひっそりと葬られています。



野原岳の変

むかし、今の友利に金志川金盛と那喜太知という兄弟がいました。ふたりは、宮古の支配者である仲宗根豊見親が、石垣島と与那国島へ遠征するときに従軍して多くの手柄をたてるなど、知恵と勇気を兼ね備えた兄弟でした。しかし、兄の金盛は、与那国島の遠征の帰りに多良間島で亡くなってしまいました。そこで弟の那喜太知が城辺を治める首長となり、金志川豊見親と呼ばれ、みんなに慕われました。

そんな金志川豊見親の威勢を妬んだ仲宗根豊見親の長男である仲屋金盛豊見親の家臣の中屋勢頭は、仲屋金盛豊見親に、「金志川豊見親は、あなたをないがしろにし、反乱を起こそうとたくらんでおります。」と言い、金志川豊見親へは、「仲屋金盛豊見親は、最近あなたのことを疑っております。」と、嘘をつきました。

だまされた仲屋金盛豊見親は、金志川豊見親を殺してしまおうと、宮古島の中央付近にある野原岳で宴を催し、そこに金志川豊見親を誘い

ました。一方、金志川豊見親は自分が争いを起こすつもりがないことを伝えるために宴へむかいました。宴もたけなわになったころ、仲屋金盛豊見親が盆を投げ捨て、「者ども出でよ!」と叫ぶと、隠れていた兵が一斉に現れました。金志川豊見親は、「私に異心がないことは太陽が照るが如しである。過ぎて後悔するでないぞ」と言いましたが、聞き入れられず、兵は剣を抜いて金志川豊見親に討ちかかりました。すると、金志川豊見親は異心がないことを証明するために、崖から身を投げてしまいました。

その後、この事件を調べるために琉球王府から糾問使が来ることになりました。それを知った仲屋金盛豊見親は、自分の過ちを後悔し、自分をだました中屋勢頭を斬り殺した後、自殺してしまいました。



ぶか ま う たき 外間御嶽



『雍正旧記 (1727)』には
外間御嶽の祭神は「男神・
根間大按司根間角嘉波良」
とされ、根間大按司の子孫
の根間角嘉波良、目黒盛、
真角与那盤、普佐盛の5代
の墓であると記しています。

根間角嘉波良は14世紀後半に宮古を統一した目黒盛豊見親
の父で、根間大按司は祖父にあたります。この墓を普佐盛の弟、
根間いかりが御嶽の形に造り変え、龍宮界から伝授された「コ
ネイリ祭」を始めたことから、以後、御嶽として人々から崇
敬されるようになったと伝えられています。

コネイリ祭

『雍正旧記』より

真角与那盤の次男、根間いかりは、
とても親孝行者でした。ある日、美
しい女が海から現れ、「あなたの孝
行の志は龍宮界まで聞こえている。
私は孝行の祭りを伝授させるため龍
宮界から遣わされた」と、根間い
かりを海の中の宮殿へ連れて行き、も
てなした後、「このコネイリ祭は、

13年に1度、9月に先祖の墓所で祭
りを行えば、島は豊かになり子孫繁栄
するので怠けず祭を行うように」と伝
授しました。以後、そのように祭りが
執り行われるようになりました。



きゅう なか そ ね し てい えん 旧仲宗根氏庭園

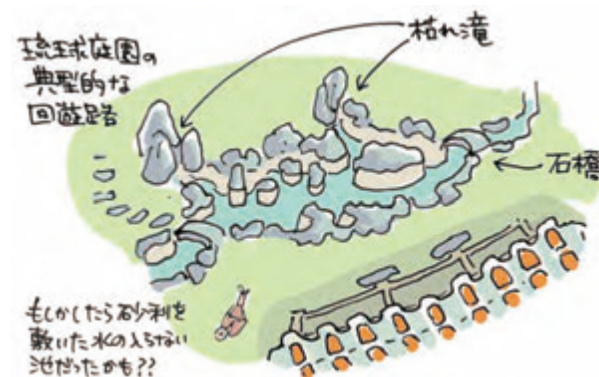


仲宗根豊見親を元祖とす
る忠導氏は、古琉球から近
代まで、与那覇勢頭豊見親
を元祖とする白川氏ととも
に宮古を二分する勢力を
誇った旧家です。仲宗根豊
見親は、14世紀後半に宮古

を統一した目黒盛の5世孫にあたります。

この庭園は、左右に細長い池泉鑑賞式庭園で、正面の池と建
物との間に芝を敷き、奥には山を設けています。池には枯滝を
2カ所配置し、周りは漆喰で固めてあります。

左から水を引き入れ、手前の小さな橋から山をぐるりと回り、
右の石橋を渡るといった、琉球庭園の典型的な回遊路の手法を
なしており、3つの立石は中心の石より右の石の方が高く、こ
れも、琉球独自の石組みです。



仲屋まぶなり御嶽



た ら ま じ ま つた
多良間島に伝わる
ま ぶ な り まくらいし
真保那璃の枕石



写真：多良間村教育委員会

この御嶽は仲屋金盛豊見親のひとり娘まぶなりを祀った御嶽です。まぶなりの父仲屋金盛は、家臣の讒言を信じて城辺友利の金志川那喜多津豊見親を殺し、王府からその罪を問われて自害しました。その娘まぶなりは、父の罪を背負い、王府に召し使われ、中山王の寵愛を受けて妊娠しますが、周囲の宮女たちに激しく嫉妬されます。その嫉妬に堪えかね、宮古島に帰る途中、船頭に乱暴されて海に投げ出され、多良間島の浜に漂着し、息を引き取りました。しばらくして浜を通

りかかった、やらぶたてよのしという男がまぶなりの亡骸を見つけ、人々を集めて「ふたつ瀬」というところに丁寧に葬ったといわれています。



尻間御嶽



旧宮古島市役所に隣接する住屋遺跡の東側にあり、『雍正旧記』には「男神・ちやくむ金大世主豊見親を祀る」と記されています。

尻間御嶽の由来

昔、下里村の住屋に住んでいた「こいと」は、子どもが欲しくて、日夜神仏にお祈りをしていました。そのかいあって、間もなく女の子が産まれ、「まんなふ」と名づけてかわいがりしました。まんなふが7才の時、母が死に、こいとは後妻をむかえます。ところが、この後妻は大変心根が悪く、ある日まんなふを誘い出し、尻間山のあぶ(洞穴)に投げ入れてしまいます。あぶの中の葛に引っかかって7日7晩泣き叫んでいる

と、天神が天から降りてきて、まんなふを抱いて昇天し、再びまんなふを連れて下界に降り、「親類と仲違いをし、先祖を敬うことを怠る者は神剣を以て罰する」と戒め、再び昇天しました。こうして人々はまんなふを神司として立て、神事を行うようになり、尻間山には「天神が降りたところ」として御嶽を建て、祀るようになりました。



住屋遺跡



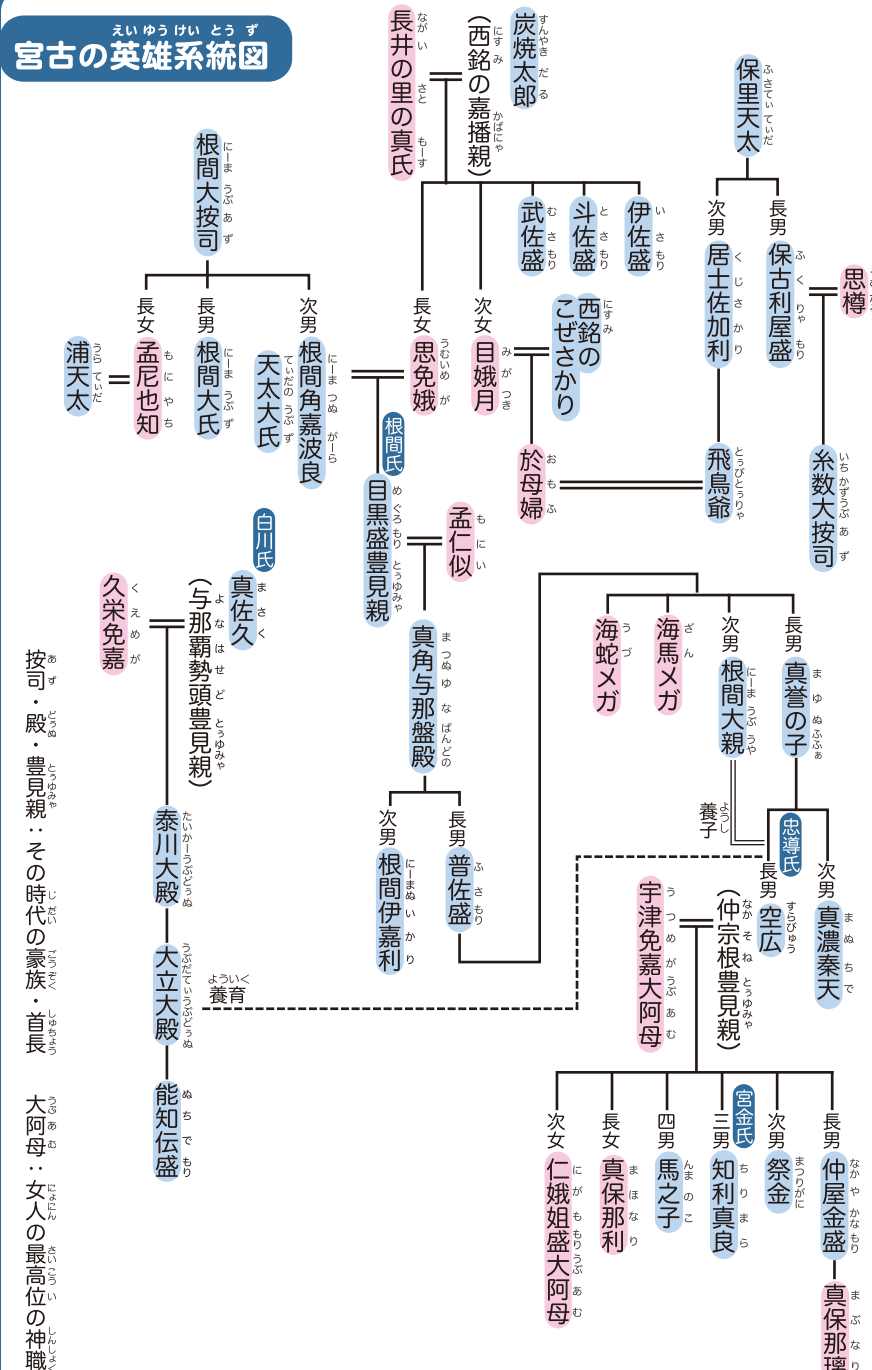
※住屋遺跡における事例
諸説あり。屋根もイメージです。

住屋遺跡は、14～17世紀初期頃の集落遺跡とされています。

1982(昭和57)年の2度にわたる発掘調査の結果、推定14～15世紀前半頃の堅穴住居址1基と、推定15世紀後半～17世紀前半の平地住居址、石敷住居址「円形状建物跡」、堅穴炉址、溜井戸などの遺構や、土器、鉄製品など様々な遺物が検出されました。同じ遺跡で堅穴ー平地ー石敷住居址と、年代が違う遺構などが検出されるのは稀であり、当時の人々の生活様式や住居形態の変遷を知る上で重要な遺跡です。また、ここは1629年に在番仮屋が設けられた場所でもあり、廃藩置県直後には警視派出所が設置され、その後、宮古島役所の開設にともなって役所長官舎、支庁長官舎、宮古民政府知事公舎、宮古群島知事公舎、琉球政府宮古支庁長公舎として重用され、近代までの諸制度の変遷を知る上でも重要です。



宮古の英雄系統図



盛加ガー (洞井)

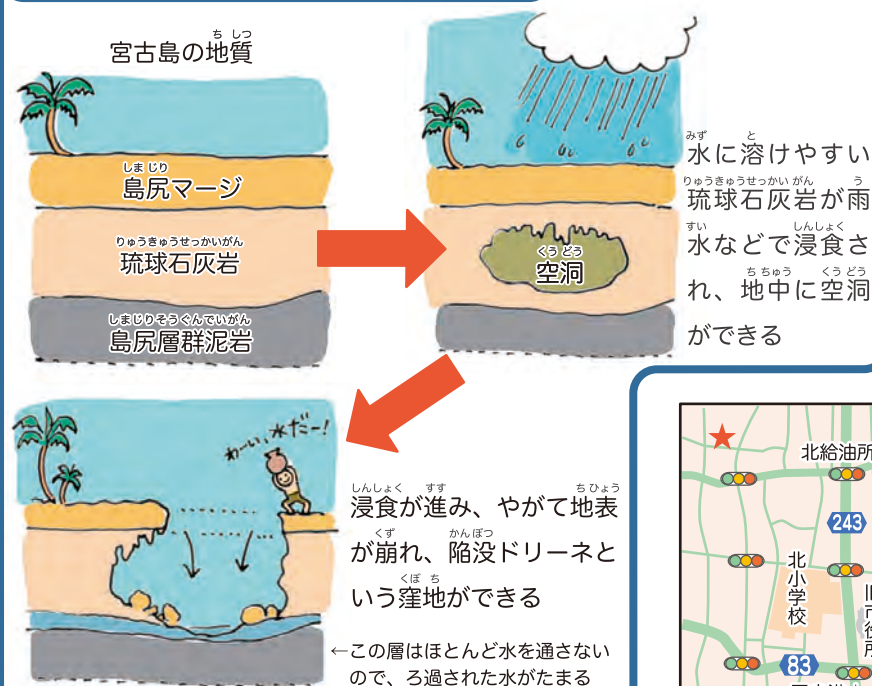


盛加ガーは、平良近郊に散在する降り井(洞井)の中でもっとも規模が大きく、直径約24mの開口部から103段の石段を降りた奥深いところに水の湧き出る口があり、石段には女性や子どもたちが踏みしめた跡が残っています。

水道の発達しなかった頃、人々の生活用水は天水と各所に散在する降り井でした。集落は降り井を中心に形成、発達してきており、宮古の歴史は降り井を切りはなして考えることはできません。盛加ガーの内部は小規模ながら貝塚層もあり、周辺一帯からは多くの青磁片、土器片などが表面から採取でき、大きな集落があったことを物語っています。郷土史家の稲村賢敷氏は、14世紀後半に勢力をふるった与那覇ばら一党の本拠地がこの一帯にあったとしています。定かではありません。



「降り井」はどうやってできたの？



文化財の体系図

文化財の種類

特に価値の高いもの

特に重要なもの

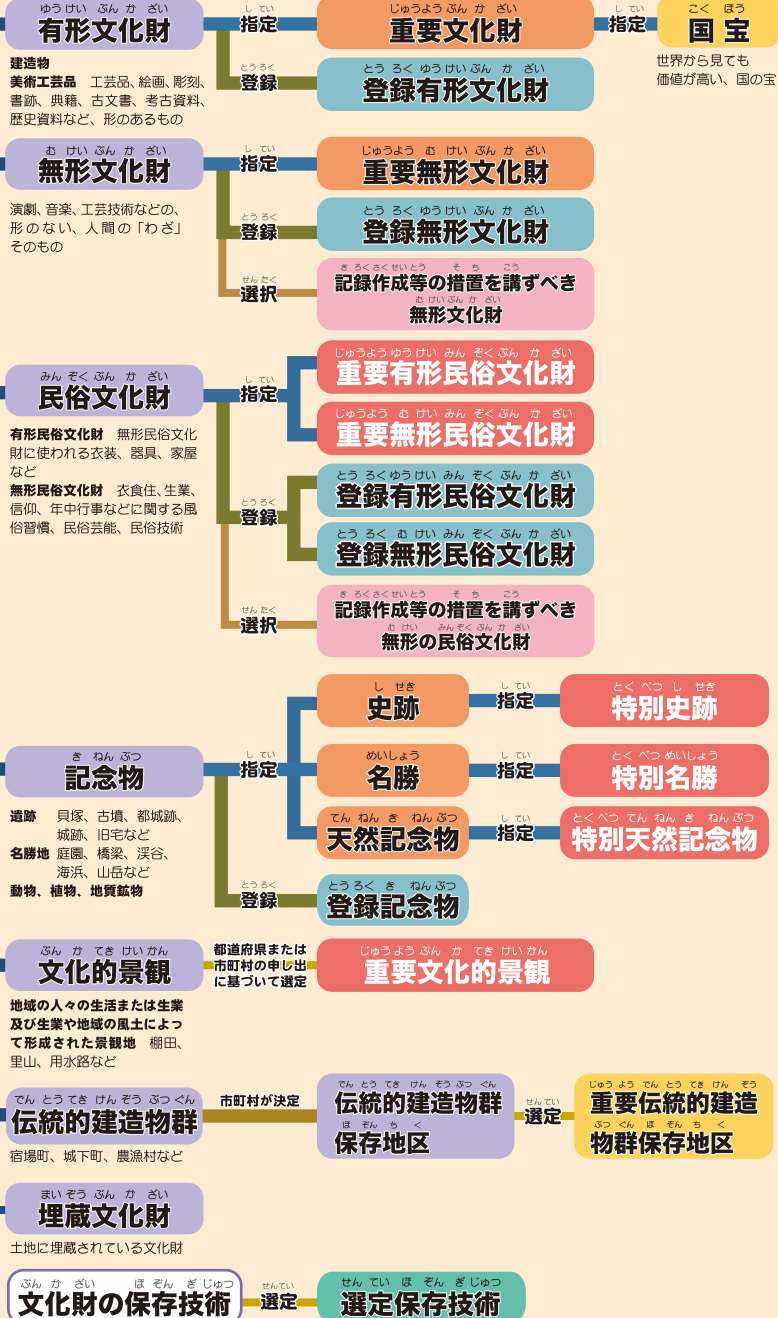
重要なもの

文化財

特に必要のあるもの

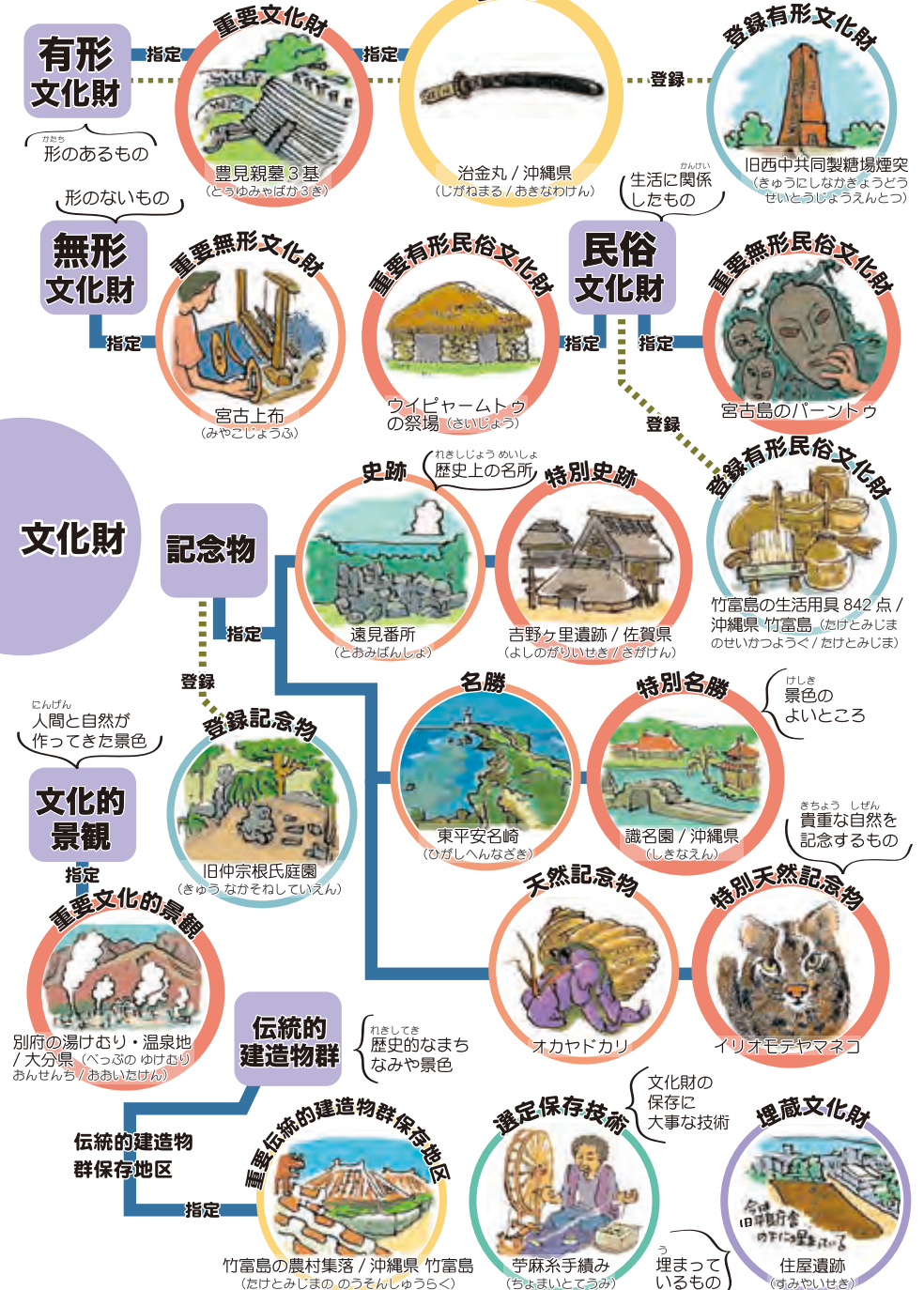
保存と活用が特に必要なもの

保存できるように考える必要のあるもの



それぞれの文化財の一例

※宮古島市や、沖縄県、九州にある文化財の一例



わたし ぶん か ざい
私たちの文化財です

たい せつ
大切にしましょう

ぶん か ざい きょ か む だん げんじょうへん こう
文化財を許可なく無断で現状変更する
ことは法律で禁止されています。



この冊子は非売品です (NOT FOR SALE)

宮古島市 neo 歴史文化ロード **綾道 (平良北コース)**

発行 初版 2014(平成26)年3月
改訂 2018(平成30)年8月・2025(令和7)年10月
編集・発行 宮古島市教育委員会
〒906-0103 沖縄県宮古島市城辺字福里600番地Ⅰ
TEL 0980-77-4947 FAX 0980-77-4957
イラスト・デザイン 山田 光